

琉球大学学術リポジトリ

八重山の民俗と国家体制：
ウムトゥ山の神の神話と聖地の変遷に焦点を当てて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2017-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Radulescu, Alina Alexandra, RADULESCU ALINA ALEXANDRA メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36685

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

八重山の民俗と国家体制
—ウムトゥ山の神の神話と聖地の変遷に焦点をあてて—

琉球大学大学院
人文社会科学研究所

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 ラドゥレスク アリーナ アレクサンドラ
Radulescu Alina Alexandra

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本論文は、八重山の民間宗教の最も重要な要素のひとつとして位置づけられてきたウムトゥ山の神と関わる神話と聖地の変遷を明らかにすることが目的とする。首里王府の史料で記されているウムトゥ山の神と関わる神話は、八重山併合を正当化装置としての性格があり、ウムトゥ山の神と関わる祭祀の変遷過程を理解する上で、国家体制と民俗との関係は考慮すべき問題である。そのため、これまでの琉球・沖縄の研究で論じられてきた民俗と国家体制をめぐる問題に関する先行研究を踏まえた上で、首里王府の宗教的支配が八重山に与えた影響についてウムトゥ山の神の事例を通して言及している。

これまでの研究では、首里王府の史料で描いているウムトゥ山の神と民衆側で信仰されるウムトゥ山の神が区別されてきた。本論文は、ウムトゥ山の神のと関わるこの二つの神観念の間に存在する相違点について検討し、それぞれの実態を明らかにすることを試みている。

首里王府が描いたウムトゥ山の神が「オヤケアカハチの乱」との関わりがある神として論じられてきたが、首里王府の史料での記述と各島で伝承される神話を分析することによって、首里側でみられるウムトゥ山の神が「オヤケアカハチの乱」の際に登場する神ではなく、それより複雑な過程である八重山併合を説明するにあたって記述されている神であると述べている。

また、八重山の離島のウムトゥ山の神と関わる神話の変遷における地方役人の役割に焦点を当てることによって、首里王府の描かれたウムトゥ山の神のイメージが八重山側でのウムトゥ山の神に対する認識の変遷に繋がることを示している。

民間側でのウムトゥ山の神と神観念を把握する手がかりとして、八重山の広い範囲で見られるウムトゥ山の「水元」としての側面に注目したほか、ウムトゥ山の神と関わる産育儀礼、家畜繁栄の祈願も紹介した。その結果、民間側で信仰されるウムトゥ山の神は『琉球国由来記』にみられるような恐ろしい神ではなく、日常生活と関わるような親しみやすい神のイメージだったことを想定できることを示した。